第三回中間報告
(2016 年 4 月 1 日～6 月 27 日)

国際ロータリー第 2710 地区
2015-2016 年度 グローバル補助金奨学生
藤村 武蔵

1. 報告書提出日：2016 年 6 月 27 日 第 3 回報告
2. 基本情報

・氏名：藤村武蔵

・ 派遣ホストクラブ及びカウンセラー：岩国中央ロータリークラブ、Mr Hidenori FUJISHIGE

・ 受入ホストクラブ及びカウンセラー：Edgware and Stanmore Rotary Club, Ms. Maxine Offredy

ロンドンに来て既に 10 ヶ月が経過し、大学院のコースも残るは修士論文の提出のみとなりました。前回の中間報告の提出から、約 2 ヶ月間フランス北部の港町カレイに修士論文のフィールド調査のために滞在しており、2 日前(6 月 25 日)にロンドンに帰ってきました。この 2 ヶ月間はほぼ毎日ダンケルケ(カレイの隣町)にある難民キャンプの子供センターでスタッフとしてボランティアをしながら、修士論文に必要なデータ収集を行っていました。ロンドンを離れた 2 ヶ月間ロンドンでもいろんなことがあったようで、特にイギリスの EU 脱退は非常に大きな波紋を引き起こしています。特に私のフィールド(難民問題関係の分野)で働くイギリス人にとってはショックが大きく、友人のイギリス人の多くが動揺しています。このイギリスの EU 脱退が引き起こす衝撃は、私が専門とする分野だけではなくその他のすべての分野で大きな変化を引き起こすことが予想されるので、注意深く経過を観察していきたいと思います。

今回の第三回中間報告では、特にフランス、ダンケルケ難民キャンプでのフィールド調査を中心に執筆させていただきます。

<u>学業面での成果</u>

3 月の下旬にはすべての授業が終了し、それ以降は第二タームに履修したモジュールのエッセイの執筆に多くの時間を費やしました。僕が所属するコースはエッセイですべての成績が評価されるため非常に重要な課題となります。一つ目のエッセイは、「Planning for Education and Development」というモジュールで、私はイラクの Domiz 難民キャンプで実施された”Child Friendly Spaces”プログラムのプランニング段階における課題の特定とプラグラム評価に関するレポートを作成しました。私はフランスのカレイとダンケルケ難民キャンプでの活動を開始してからずっと、難民キャンプにおける子供の遊び環境に対して非常に強い興味をもっていたので、このレポート作成は私にとって非常に実践的であり多くの知識を取得することができたと思っています。２つ目のエッセイは、「Education, Conflict and Fragility」というモジュールのエッセイで、私はレバノンの難民キャンプで実施されたシリア人の子供に対する教育政策の課題特定と、それらの課題を解決しうる施策の提言に関するエッセイを執筆しました。レバノンは最も多くシリアからの難民を受け入れている国であり、本エッセイの執筆を通して収集した情報は非常に興味深く学ぶところが多くありました。これら 2 つのエッセイ共、5 月の中旬の締め切り通りに提出し、現在はエッセイの結果を待っている状況です。

エッセイの執筆と平行し、4 月の中旬からは生活の拠点をロンドンからフランスのカレイに移し、修士論文のフィールド調査に従事していました。ダンケルケ難民キャンプにある子供センターでボランティアもしていたため、基本的には夕方まで子供センターで働き、夕方 5 時以降に自身の修士論文のためのデータ収集を行う、という生活を行っていました。修士論文のテーマが”Better Understand Children’s Situations in Dunkirk Refugee Camp”であるため、難民

キャンプに暮らす子供達の親を対象にインタビューを行いました。インタビューでは、子供達たちの過去、現在、将来に注目し、母国から難民キャップまでの旅路と難民キャンプでの生活を振り返り、子供にどういった変化(行動特徴、性格等)が生じているかを共有してもらいました。ダンケルケ難民キャンプの人口の 85%がイラク国内のクルド人で構成されており、多くの人々が母国での ISIS 関係の紛争のために国を追われ難民となった方々です。母国での紛争や母国からフランスにたどり着くまでの旅路、難民キャンプでの生活を通して多くの子どもが様々な危険な出来事、暴力に関連する経験を体験しているため、私の目からは子供たちが非常に疲弊し、加え一切のモラルを失っているように感じました。このことが大きな要因となり、ダンケルケ難民キャンプの子供の状況に関しての修士論文を執筆することを決めました。この 2 ヶ月間は、毎日朝から夜遅くまで活動していたため非常に短く感じられ、あっという間に時間が過ぎた感覚がしています。しかし、合計で 14 人の保護者からのインタビューと、9 人の難民キャンプで子供に関係するプログラムを実施している団体スタッフからのインタビューを収集し、無事 6 月 25 日にフィールド調査を終えました。残るは修士論文の執筆のみとなったため、残りの 2 ヶ月間をかけて修士論文の執筆に専念したいと考えています。

<u>受け入れ地区でのロータリーとの関わり</u>

本中間報告期間中においては、私自身がフランス、カレイに拠点を移していたためこれまでのようにロンドンでロータリークラブの方々と直接関わりを持つことはあまりできませんでしたが、メール等で連絡をとり続けていました。その中でも、以前から企画していた難民キャンプでのワークショップの開催に関して、私の受け入れ地区のロータリークラブメンバーの方々に大きなサポートをしていただいています。

カレイでの活動を開始した当初から、難民キャンプの子どもたちに対して、彼らが楽しみながら自分らしさを取り戻すきっかけをつくることができないかと考え続けていた際、ロータリーの他の奨学生との出会いがきっかけとなり、難民キャンプでのドラマ・ワークショップの開催を昨年の 12 月から企画していました。ニュージーランドからロータリーのグローバル補助金を使って、ロンドン大学のゴールドスミス校で“Applied Theatre”を勉強している Steve という奨学生と難民キャンプでのワークショップの開催を企画していたのですが、以前 1 月に私の受け入れ先ロータリークラブのプレゼンテーションでこの企画の話しをした際、多くの方から共感いただき、ワークショップの開催にロータリークラブからサポートしていただけることになりました。このワークショップの開催に向けて、本期間は主に、受け入れ地区のロータリークラブの担当者の方々との連絡や、企画書作成に際してのアドバイス等の相談をしていただきました。難民の方々へのサポートが直接的ではないにしろ、ロータリークラブの 6 つの重点分野の「紛争解決」に合致することと、加えて難民問題がイギリスの隣国であるフランスで起こ

っているという事実に強く問題意識を持っていらっしゃるロターリアンの方が多くいらっしゃり、非常に献身的にサポートを頂いています。本ワークショップは、主に若い世代の難民の方々に歌やダンス、ゲーム等を通して自分を表現する機会を提供し、日頃表現できない新しい自分の側面の発見と一人ひとりの社会における自身の立場の認識を促し、ひいては参加者一人ひとりがより良い社会の変革の担い手になることを最終的な目標としています。現在は、本ワークショップを 7 月、あるいは修士論文執筆後の 9 月以降の実施に向けて、企画と調整を行っています。

加えて、一度カレイからロンドンに戻った際の 5 月 9 日には、ロンドン地区のロータリー奨学生を集めたホームパーティを Stella さんというロンドン地区の奨学生受け入れ担当者の方が開いてくださり、多くのロータリー奨学生が集まり、日頃の出来事の共有を行いました。この会が公式にロンドン地区の奨学生が一同に集う最後の場であったため、非常に名残惜しい雰囲気とともに、久々に集合したロータリー奨学生の間では近況報告や勉強の進み具合等いつもと変わらない素敵な空間となりました。

ホームパーティでの奨学生同士の交流の様子

今後の課題・目標

今後の目標は、やはり 9 月 1 日の締め切りまでに納得のいく修士論文を執筆することです。修士論文がこれまで 1 年間学んだこと、難民キャンプ等の現場で経験したことの集大成となるため、中途半端な内容にしたくないという強い気持ちがあります。しかし、実際には残り 2 ヶ月間ほどしか期間が残されてないため非常に時間的な余裕がないというのが現状です。これまでの 2 ヶ月間は現場のスタッフとして働いていたため修士論文を執筆するという時間的余裕がありませんでしたが、この残された 2 ヶ月間はしっかりと本腰を据えて修士論文の執筆に取り組みたいと思います。また、加え、修士論文提出後の進路についても同時並行で進めていかないといけないため、時間のある際には就職活動を行っていく予定です。プログラム修了後は、これまで学校と現場で学び習得した知識と経験を活かしより専門的に仕事をしていきたいという強い思いがあるため、就職活動の方も気を引き締めて行っていきたいと思います。